

繭玉飾り（まゆだまかざり）

マイダマ、メーダマ飾りともよばれた小正月の年中行事。

上泉では4日か7日に菩提寺へ「寺年始」に行き、帰り道、小正月に飾るメーダマ（繭玉）の木（ミズキ）を取ってきて、小正月の時まで保存しておく。麓2区では12、3日頃にメーダマの木迎えをしていた。ミズキ（水木）は火除けの木と考えられてよく使われたが、ケヤキやユノミの木を使うこともあった。



11日の吉田の市（一・六の市）では小正月用品を買ってくるが、繭玉飾りに使う宝船、鯛、大判・小判、恵比須・大黒など縁起物を型どったせんべいも買うことができた。

14日にメーダマ（繭玉）作りをする。メーダマの木（ミズキ）の枝に、米の粉で作った団子を刺し、藁のヌイゴに小さい餅玉、あるいは「ひねり餅」をつけたイナボ（稲穂）を下げる。さらに鯛や大判などの飾りせんべいを枝いっぱい吊るしてにぎやかなメーダマにし、茶の間や蔵に飾る。弥彦や泉ではこの作業を「田植」と呼び、家族全員で飾った。メーダマの込み具合でその年の作占い（枝の混んでいる方向の田は良い）をすることもあり、家内安全、豊作を祈願した。

この夜を「小歳」と呼び、大晦日の夜と同じように早夕飯にして年取り魚の付いた「年取りの膳」がメーダマの飾られる茶の間に並べられ、家族揃って2度目の年取りをした。翌15日の小正月の朝は、特に宮参りはせず、朝食は餅の入った小豆粥を食べる。16、17日も朝食は雑煮餅で、仕事は休みであった。

20日は「二十日正月」で、雑煮餅。この日で正月は終わりとなり、小正月うち飾っておいたメーダマをこの日に下ろすことになっていた。そのことを「稲刈り」と呼んできた。メーダマの団子を保存しておき、春の田んぼ仕事が始まると、イキドリ（息切れ）の薬になるからといい、コビリの時にこの団子を食べていた。メーダマ飾りに使ったせんべいはおたふく風邪に効くといっているのでしまっておいたこともあった。

今では繭玉飾りをする家庭はほとんど見られなくなったが、旅館や店屋で小正月を彩る装飾としてみられることがある。